

西神教会 2019年春の特別伝道集会（朝拝）

「キリスト教信仰が与える希望—神の愛の絆—」

聖書箇所：コロサイの信徒への手紙3章12-14節

2019. 5. 26 弓矢健児

<はじめに>

本日は、西神教会の春の特別伝道礼拝によろしくお越しくございました。

クリスチャンでない方、教会に行ったことのない方の中には、「キリスト教はどんなことを教えているのだろうか、少し興味はあるけれど信者でない者が礼拝に出席してもいいのだろうか?」、そんな風に考えている方もいらっしゃるかと思います。しかし、日頃そんな風に思っておられる方々でも気軽に礼拝に出席していただけるようにと、私たちの教会では毎年テーマを決めて伝道礼拝を開催しています。

今回は、「あなたにとって宗教とは」というテーマの下、朝の礼拝と午後の礼拝の2回に渡ってメッセージを語ります。そして、この朝の礼拝では、「キリスト教信仰が与える希望」という題でお話ししたいと思います。

<1：共に生きる存在としての人間>

1995年1月17日に起きた阪神淡路大震災から24年が経ちました。また、2011年3月11日に起こった東日本大震災から8年が過ぎました。私たちは、あの未曾有の大災害の前に、人間の弱さや無力さをいやと言うほど思い知らされました。しかし、その一方で、一人一人は無力でも、いや無力だからこそ、他者に寄り添い、他者と共に生きることの大切さを改めて教えられました。

私たち人間は一人一人違いますし、一人一人が個人としての尊厳を持っています。しかし、同時に、人間は個々人がバラバラに存在しているわけではありません。意識する、しないに関わらず、人間は他者と共に生きる存在です。なぜなら人間は一人一人の違いを超えて、実は繋がっている、結びついているからです。そして、阪神淡路大震災や東日本大震災の経験から分かることは、誰もが心の底に、「共に生きたい」という願いを持っているということです。

「何か自分にできることはないだろうか、居ても立ってもいられない」。そういう思いに駆られて、支援活動に参加した人は多くいます。また、直接支援活動に参加できなくても、募金をしたり、援助物資を送ったりした人も多いのではないのでしょうか。

教会でも募金をしたり、また、様々な支援の働きをしました。

「絆」という言葉が、いろいろな所で使われるようになりました。未曾有の大災害のただ中で、多くの方が、他者との絆、つながりを大切にしたい、他者のために仕えたい、役立ちたい、という思いを強くされました。それは本来、人間が共に生きる存在であるからです。そして、私はそこに人間の宗教性があると思います。特定の宗教団体に属していなくても、また特定の宗教を信仰しているという自覚がなくても、人間は共に生きる存在であるからこそ、誰もが心の中に「宗教性」を持っているのです。

少し前に面白い本を読みました。本のタイトルは「利他的な遺伝子」（柳澤嘉一郎、筑摩書房、2011年）という題です。この本の著者は著名な生物学者ですが、他の動物と比較して、人間の行動に利他的な面が強いのは、「利他的な遺伝子」があるからだと言うのです。この方の解説によれば、人間が他人との絆を求め、他人に共感し、信頼感を持ち、相手に何かしてあげたい、という利他的な感情を抱くのは、人間には利他的な遺伝子があって、それが胎児期に脳に形成されるからだというのです。

もちろん、人間の性格や感情は誕生後の人間関係や教育などの環境に大きく影響されます。しかし、そもそも人間には生まれ持った利他的な遺伝子があるというのです。そして、そうした利他的な遺伝子の働きによって、複雑な脳神経細胞のネットワークが作られ、そして、そうした脳の複雑な働きの中で、様々なホルモン物質が作られ、その微妙な働きが人間の本能的な感情形成に大きな影響を与えているというのです。

私は生物学者や脳神経外科医ではありませんから、専門的なことはわかりません。ただ、私がおその本を読んで思ったのは、「人間には生まれ持った利他的な遺伝子がある」という考えが、聖書が教えていることと類似している点があるということです。もちろん、聖書は自然科学の書物ではありません。しかし、聖書は人間とは本来何であるのかを、信仰の言葉ではっきりと教えています。どのように教えているかという、旧約聖書の創世記1章27節に次のようにあります。

「神はご自分にかたどって人を創造された。男と女に創造された」

人間が「神にかたどって創造された」とは、どういう意味でしょうか。聖書を見ると「神は愛である」とあります。神は私たちを愛してくださっているお方です。愛によって常に人間に向き合ってくださいしているお方です。つまり、人間が神にかたどって男と女に創造されたということの意味は、神の愛の中で共に生きる存在として、人間は造られているということです。

人間に利他的な遺伝子があるのか、どうか、私にはわかりません。しかし、聖書が教えていることは、神は人間を「互いに愛し合って生きる存在」として創造されたということです。

先程、私は、すべての人間には宗教性があると言いました。その宗教性というのは、つまり、互いに愛し合って生きるよう、人間が神にかたどって造られている、という事実に根ざしているということなのです。

東日本大震災の後、誰から強制されるのでもなく、多くの人々の中に起こった、「被災地の人々を助けたい、絆を大切にしたい」という自然な思い、それはまさに、神にかたどって造られた人間の「宗教性」に根ざしているのです。さらに言うならば、神の愛に根ざしているということです。このように考えてくると、人間と人間との間に絆を作りだしているのは、神の愛であると言えます。神の愛が絆となって、私たち人間の心を深い所で結びつけているということだと思います。

本日の聖書箇所、コロサイの信徒への手紙3章14節でも、そのことが次のように言われていました。「これらすべてに加えて、愛を身につけなさい。愛はすべてを完成させるきずなです」。

ともすると、私たちは絆を人間の力や努力で作りに出された物であると錯覚してしまうことがあります。道徳的、人格的に優れた人が絆を作り出すことができると思ってしまいませんか。しかし、目の前で困っている人、苦しんでいる人がいたとき、私たちは通常、自然に手を差し伸べるのではないのでしょうか。

以前、駅のプラットホームで誤って下に転落した人を、ある大学生がホームから飛び降りて救ったという記事が出ていました。その大学生は記者の質問に対して、「その時のことはよく覚えていません。ともかく夢中でした」、と答えていました。気がついたら、ホームに降りて助けていたというのです。もちろん、そのような行動を誰もができるわけではありません。しかし、手に持っていた荷物や品物を落としてしまった時、近くにいた人が一緒に拾ってくれたという経験はきっと誰にも一度はあるのではないのでしょうか。そういう親切や思いやりは、私たちの自然な思いとして出てくるのだと思います。なぜならば、人間の心の中にある神の愛が絆となって、そのような思いへと私たちを導いてくれるからです。

< 2 : 神の愛を否定する罪の問題 >

しかし、ここで私たちはもう一つの現実にも目を向けなければなりません。それは人間のエゴの問題です。人間は他者との絆を大切に、他者を愛し、他者と共に生きたいと願う反面、自分の欲のために他者を傷つけたり、虐げたりします。極端な場合、相手の命をも奪います。自国の利益のために戦争をして、大量に人を殺すのも人間です。毎日報道される様々な犯罪事件。国際紛争。そうした現実を見る時、私たちはエゴイズムこそが人間の本質ではないかとさえ思ってしまう。愛し合い、お互いの絆を深めて生きるべき人間が、どうして、そのようにして人を傷つけ、自分をも傷つけてしまうのか。そう自問せずにはいられません。

あの東日本大震災の援助のため、日本だけでなく、世界中からたくさんの義援金が日本に寄せられました。その中には経済的に豊かな国だけでなく、貧しい国の人々からの義援金も多くありました。世界中のすべての人々の心には愛があるし、世界中のすべての人が自分の国を超えた愛の絆を自覚しています。しかし、そうであるにも関わらず、そのような愛を示してくださった、絆を示してくださった国の中にも、また国と国の間でも、戦争や争いが起こって、多くの人々の命が奪われています。

日本でも同じです。以前 NHK 特集で「無縁社会ニッポン」という番組が放映されていました。今日本では一人で生活する人が急速に増えています。様々な事情により、家族の絆を失い、一人で生活し、その後不景気で失業し、家においても、社会においても、まったく他者との関わりを失ってしまい、一人で生きている人が増えています。そうした孤独の中で誰にも看取られずにひっそりと亡くなって行く人の数は、なんと3万2千人を超えと言われます。番組のインタビューの中で、一人で暮らしている私と同じぐらいの年齢の50歳代の男性が語っていた言葉が非常に心に残りました。その方は、「誰とも関わりが無くなって生きていると、自分の存在が実感できなくなってくる。自分が存在していないように感じる」、とおっしゃっていました。他者との絆がなくなると、人間は自分の存在さえ実感できなくなってしまうのです。なぜなら、人間はそもそも他者を愛し、他者と共に生きる存在であるからです。しかし、それにも関わらず、今、私たちの社会の中では、他者との絆を失い、自分の存在さえも実感できず、希望を失って孤独の中を生きなければならない人々が急激に増えているのです。

何度も言うように、人間は誰もが神の愛という絆を与えられ、心の中に宗教性をもっています。それによって、私たちは相手を愛し、相手を思いやり、相手と共にいき

たいと願ってきた。いや、今も願っています。そうであるにも関わらず、もう一方で人間は心の中に、自分さえ良ければいいというエゴイズムを抱えている。それによって人を傷つけ、絆を壊してしまいます。人間が作る社会も同じです。国と国が、民族と民族が争い、戦争をしている。経済効率優先の格差社会の中で、孤独に追いやられる人々を生み出している。少数者の人権や自由が抑圧されている。一体どうして、このようなことになってしまったのでしょうか。

聖書はそこに罪があることを指摘しているのです。「自分さえ良ければいい」というエゴイズムの背後には、人間の罪の問題があると聖書は語るのです。直接、人を殺したり、盗んだり、犯罪行為を行うことはもちろん罪です。しかし、心の中で人を憎んだり、妬んだり、怒ったり、^{よこしま}邪な思いを抱いたり。聖書はそれも罪であると言います。そして、誰もが心の中にそのような罪を持っています。罪の無い人は誰もいません。そして、そのような私たち一人一人の罪が複雑に結びついて、世界の中に様々な悲惨な現実、悪の現実を生み出しているのです。

しかし、どうして人間には罪があるのか。聖書は、最初に人間であるアダムとエバが、神のようになろうとして、神の禁じられた善悪の知識の木の実を食べたからであると教えています。つまり、この物語が教えていることは、人間と神との関係の歪みです。神の愛の中で、神に感謝して生きるべき人間が、自ら神のようになろうとした。それによって、神と人間との関係に大きな歪みが生じたのです。そこに罪の根があるということです。そして、その時以来、人間は神の愛に背を向けて生きて来たのです。

神が私たちが愛しておられることには何ら変わりません。しかし、人間は神の愛を無視して生きるようになってしまったのです。つまり、人間は自ら「神との愛の絆」に背を向け、その絆を無視し、歪めてしまったということです。それが人間の罪の現実です。ですから、大切なことは、この神との愛の絆を正しい状態に回復しなければならない、ということなのです。

神の愛の絆は決してなくなってしまうことはありません。誰もが心に持っています。しかし、問題はどうしたらそれが正しい状態に回復されるのかということなのです。

< 3 : イエスに繋がることによって回復される絆 >

お開きになれる方は、ヨハネによる福音書 15 章 1 - 5 節をご覧ください。

ここで主イエスは、自分のことを「ぶどうの木」に譬えておられます。そして、私

たちのことを「ぶどうの枝」であるとおっしゃっています。ぶどうの枝はぶどうの木に繋がっていてこそ、生きることができます。ぶどうの木から離れて、ぶどうの枝は生きることも、実を結ぶこともできません。つまり、ぶどうの木であるイエス・キリストこそが愛の絆となって、神と人間との間の愛の関係を、そして人間と人間との間の愛の関係を回復させてくださるということです。

聖書は父なる神が、御子イエス・キリストを世に遣わされたと教えています。しかし、なぜイエスがこの世界に来られたのかというと、人間の罪によって、エゴによって歪んでしまった「愛の絆」を回復させてくださるためです。そのために、イエス・キリストは聖書に記されているように、十字架の死に至るまで、徹底的に愛に生きられました。この世の弱い者、貧しい者、差別され、迫害されていた者、様々な困難や痛みの中で苦しんでいた人々、生きる意味も希望を失っていた人々と真剣に向き合ってください、彼らを愛してください、最後には私たち罪人の身代わりとなって、十字架にかかって、命を犠牲にしてくださったのです。そのようにして、イエス・キリストご自身が愛の絆となってくださったのです。ですから、イエス・キリストに出会い、キリストの愛を受け止める時、私たちの愛の絆は回復されていくのです。いや、私たちだけでなく、神の創造なさったこの世界における愛の絆もまた回復していくのです。

もし、人間が自分たちの力で愛を生み出し、自分たちの力でこの世界のすべての物を愛し、絆を回復させなければならないとするならば、とてもそれは不可能です。私たちは自分の中にある罪の現実を見る時、とても自分の力で、そのようなことができるとは思いません。なぜなら、私たちは愛したい、共に生きたいと願いながらも、もう一方で、罪に支配され、自分のエゴや欲望を満たすために行動してしまうからです。

私たちの心の中には、絶えずこの二つの力のせめぎ合いがあります。闘いがあります。また、この世界の中にも、愛と平和によって共に生きようとする力と、エゴによって世界を破滅させようとする罪の力との闘いがあります。私たちは、この正反対の二つの力が闘っている現実の中で、人を愛し、人を傷つけ、自分もまた傷つき、苦しんで生きているのです。これが罪人である人間の現実です。しかし、神はそういう現実の中で、苦しんでいる私たちを救うために、そして、私たちの中に愛の絆を回復させ、私たちを罪との闘いに勝利させるために、イエス・キリストを遣わしてくださったのです。ですから、大切なことは、私たちのぶどうの木であるイエス・キリストの愛をしっかりと受け止め、イエス・キリストに繋がっていくことです。このキリスト

の愛に満たされ、生かされてこそ、私たちは自分の罪、またこの世界の罪や悪の現実と戦いながら、愛に生きる者へと変えられていくのです。

私たちだけではありません。この世界もまた、本当の意味で愛と平和の満ち溢れる世界へと変えられて行くのです。もちろん、イエス・キリストを信じたら、すぐにそうなるというわけではありません。しかし、神は必ずそのすべてを実現してください。なぜならば、イエス・キリストによって、私たちは既に神の愛の絆を回復されているからです。だから、私たちには希望があるのです。

<おわりに>

聖書は、「愛の絆の回復」という素晴らしい希望を私たちに教えている書物です。キリスト教信仰は、このような愛と希望の中で、私たちが共に生きる人生へと導く信仰です。私たちの人生も、この世界も様々な問題に満ちています。思いもよらない試練や困難に遭遇することもあります。しかし、どんなことが起こっても、イエス・キリストの愛は、私たちをしっかりと結びつける絆です。どんな時も、夢を信じ、希望を信じ、未来を信じて共に生きる者でありたいと願います。

<祈り>

愛する天の神様。

罪と悲慘の中であって苦しんでいた私たちに、イエス・キリストを通して、愛の絆を回復して下さったことを感謝します。どうか、どんな時もイエス・キリストの愛に固く結ばれて生きることができるよう。どうか、あなたの愛の中で、忍耐を与えられ、困難の中でも希望を持って共に生きることができるよう導いてください。

特に、今悲しんでいる者たち、苦しんでいる者たちに、あなたからの愛と希望が届けられますように。

主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。